



**BEARERS  
OF THE GIFT  
OF THE GOSPEL**

アジジ総集会総括文書

2009年



## 目 次

総括文書「福音の賜物の使者」 .....	4
親愛なる兄弟の皆様、 .....	7
I.福音の賜物 .....	9
II.福音の賜物に応える .....	12
諸国の民へのミッション .....	17
境界に身を置くこと .....	19
信徒及び「彼らと共に行う福音宣教」 .....	21
生活とミッションの兄弟共同体としての計画 (plan) .....	23
結論 .....	25

## 総括文書

### 福音の賜物の使者

#### 総長の挨拶

親愛なる兄弟の皆様

**主が平和をお与えくださいますように！**

第187回総集會を祝うことをお許しくださった主に心から感謝しつつ、ここに総括文書を御紹介できることを嬉しく思います。総括文書の題名は**福音の賜物の使者**です。

今回の総集會はひらめきを与えるような何かを兄弟たちに提供することを目指していました。それゆえ、この文書は会の状態を分析したものではなく、むしろ、これから歩んで行く道りを希望に満ちて提案するものです。いくつかの分野においては、すでに歩みを進めています。そのほかの分野は、準備が必要です。また、時のしるしを読み、そのしるしに大胆さと創造性をもって、福音に忠実に応えるために注意深くあれとの聖霊からの呼びかけを受けている分野もあります。このようにして私たちは、未来に目を向け、主が私たちを招いてくださっているさまざまな状況の中で福音を体現してゆくのです。この文書の真の価値が表れている場所はここ、すなわち、評価の基準となり、福音化する生活とミッションの指針となるという役割の中にあります。この文書の最善の活用法は、その中身を自分自身の生活と比較して見ること

です。この比較を静肅に、真剣な気持ちで、未来への展望をもって行う必要があります。この比較は、すべての構成単位と管区長協議会を含め、地域の兄弟共同体から会の総本部にいたるまで、あらゆるレベルで行われなければなりません。それは、私たちの述べていることと実生活を一貫性のあるものにするのに必要な回心を始める助けとなるはずです。私は、ある種の**再評価と識別の期間**を兄弟共同体の中で、各構成単位において、また、全体的なレベルにおいて宣言することの有用性を、「総集会への報告書」の中で、また、総集会会場において強調しました。この**再評価と識別の期間**は、共同の識別のための場を提供してくれることでしょう。私は、この文書がそのようなプロセスを推し進めるための貴重な道具となることを確信しております。

2009年の総集会から出されたこの文書を注意深く読んでくださるように、すべての兄弟と皆様お一人お一人にお願いいたします。中身からひらめきを得て、皆さまはご自分の生活とミッションを見極めることができるでしょう。そして、それによって、先例のない証しと存在の取り組みを始めることができ、それによって毎日が、心を主に向けて、兄弟としてまた小さき者として福音を告げ知らせるために出かける上で、より意義深いものとなることでしょう。

私は回心のプロセスに着手することについて述べて来ました。このことがいかに難しいことであるかは、誰もが知っています。無気力がはびこり、多くの障害物があるために、私たちは恵みに背を向けてしまっているのです！しかし、この文書は、最初から

最後まで三位一体の神秘に絶えず言及しています。父なる神にましまし、御子を世に遣わされ、御父と御子から出た聖霊を私たちに授けて下さった神について触れています。私たちは聖霊の永続的で確実な御働きを信頼することができます。会の真の総長であるこの聖霊の御働きに対する確信が、私たちの希望となり、自信となりますように願っております。

ローマ、2009年7月15日

熾天使的博士の祝日に

総長 兄弟ホセ・ロドリゲス・カルバッリヨ、ofm

## 父と子と聖霊の御名によって、アーメン。<sup>1</sup>

小さき兄弟会の総集会は、尊敬と誠実な愛を込めて、すべての兄弟に挨拶を送ります。あなた方は、主なる神によって世に遣わされ、さまざまな国や文化で、言葉と行いの証しによって主以外には全能の神はましまさないことを告げ知らせておられます<sup>2</sup>。そして、この手紙を受け取るすべての人に、あなたがたの小さく、卑しいしもべ兄弟フランシスコは、健康と平和を願います<sup>3</sup>。

### 親愛なる兄弟の皆様、

1. 総集会は聖霊降臨祭に行われることを明記した会則に従い<sup>4</sup>、《2009年》5月24日から6月20日まで、本会の《第187回》総集会を祝うために、主は私たちをポルチウンクラの天使の聖母聖堂に集めてくださいました。

この総集会が、フランシスカンの生活様式（フォルマ・ヴィテ）が認可された《800周年》を記念する年に、しかも本兄弟会の誕生した場所で行われたことは、大変意義深いことです。文化の異なるかくもさまざまな国々から兄弟たちがここに集っているということは、主イエス・キリストの福音に他ならぬフランシスコの生活プロジェクト<sup>5</sup>が実り豊かな力を持っていることを雄弁に物語るしるしです。

2. フランシスコの福音の独特な読み方が本質的に実践と生き

---

1 全兄弟会にあてた手紙 1。

2 全兄弟会にあてた手紙 9。

3 民の支配者への手紙 1。

4 裁可会則 8:2-3。

5 裁可会則 1:1。

方である以上<sup>6</sup>、私たちは実践が**私たちの召命をよりよく理解するための道として**<sup>7</sup>最も重要であることを再確認いたします。それゆえ、私たちは自分の話し方と現実の生活との間にしばしばずれが生じていることを憂慮しております。だからこそ、本総集会は、教義的な文書を書くことよりも、むしろ兄弟たちの日々の生活に働きかけ、鼓舞するようなメッセージを書くことを望んだのです。それで、私たちはそのメッセージを、フランシスコがその兄弟たちに勧めたように、**簡潔な言葉で**<sup>8</sup>書くことを望みました。なぜなら、そうすることもまた、本質に立ち返る方法であるからです。

3. 本総集会のテーマは、福音化するミッションですが、それは、**生活様式（フォルマ・ヴィテ）**としてフランシスコに与えられた福音の賜物を主に**《お返しする（restore）》**最適な手段です<sup>9</sup>。私たちは「賜物」という言葉を、フランシスコが「主は私に兄弟たちをお与えになりました」<sup>10</sup>と言った時と同じ意味で使っています。そして、**《お返しする》**という言葉を、フランシスコが「私たちは、すべての善をいと高く至高の神なる主に返し、あらゆる善が主のものであることを認め、すべてのことについてあらゆる善の源である神に感謝しなければならない」<sup>11</sup>と言った時と同じ意味で使っています。それゆえ、**《お返しする》**ということは、無所有となることを表しているのです。

4. このメッセージにおいて、これらの二つの側面（「賜物」と「お返しする」こと）についていくつかの考察を述べたいと思い

---

<sup>6</sup> 3人の伴侶の伝記 28 参照。

<sup>7</sup> 主は道々私たちに話してくださる 10-11。

<sup>8</sup> 裁可会則 9:4。

<sup>9</sup> 総長報告書 16。

<sup>10</sup> 遺言 14。

<sup>11</sup> 非裁可会則 17:17。

ます。いずれも、私たちの**生活とミッション**の起源となるもので、私たちが人々の生活、ニーズ、問いかけ、挑戦のただなかに置いてくれるものです。神の国の善い知らせを告げ知らせることは、つまり、新しい正義の世界の種子、平和と兄弟性の種子を告げ知らせることは、今日かつてないほどに人々の希望の源とならなくてはなりません。

## I.福音の賜物

5. 主は、私・兄弟フランシスコに、与えてくださいました・・・主は私を重い皮膚病の人たちの中に導いてくださいました・・・主は私に兄弟たちをお与えになりました・・・主は啓示してくださいました<sup>12</sup>、など、フランシスコの遺言の言葉は、深い真理を示しています。すべてのことの初めに、すべての善の源であられる主、全き善、最高の善、完全な善、あなただけが善にまします神<sup>13</sup>がおられるのです。このように、すべての現実には神からの賜物として現れ、すべての賜物の中でも最高の賜物は、祝された栄えある御子—御父が私たちにお与えになり、私たちのために生まれてくださったその御子<sup>14</sup>です。これこそは、私たちに授けられた善い知らせです。すなわち、**神の御子、イエス・キリストの福音**<sup>15</sup>、アシジのフランシスコの生活を変え、私たち一人一人の生活を変えてくれる賜物なのです。

6. 福音の賜物は、私たち兄弟共同体の起源です。フランシスコの遺言の中では、兄弟という賜物と福音的な生活様式という賜

---

<sup>12</sup> 遺言 1,2,14,23。

<sup>13</sup> 全時課に唱えられるべき賛美、祈願。

<sup>14</sup> 全キリスト者への手紙 II,11。

<sup>15</sup> マルコ 1:1。

物とは密接な関係があります<sup>16</sup>。最初の二人の仲間がフランシスコに、フランシスコと共に生活するにはどうすべきかと尋ねた時、フランシスコは「キリスト御自身がなんと仰せになるか見てみよう」と言って、二人と共に教会に行って福音書を三度開きました<sup>17</sup>。そこで語られたのはキリストであり、キリストの声に耳を傾けることから、聖霊による新しい絆が生まれました。それが、最初の兄弟共同体です。フランシスコ会の種である兄弟たちのこの小さな集団は、この創立の瞬間に、仕事によるいかなる区別もありませんでした。彼らは福音を真剣に受けとめたいと願う信徒にすぎません。しばらくしてから司祭たちも兄弟たちの仲間に加わることとなりますが、彼らの基本的なインスピレーションは相変わらず福音によるものです。

7. 創立当初から、兄弟共同体は自分が体験していることを告げ知らせるように招かれていることを知っていました。チェラノのトマスは、まだ兄弟たちが8名しかいなかった最初の頃、彼らは世界中に派遣されたと述べています<sup>18</sup>。フランシスコとその兄弟たちは、こうして福音の先ぶれとなり使者となったのです。これは後にフランシスカン生活の特徴となり、会則にもこのことがはっきりと明記されています<sup>19</sup>。それはつまり、巡業の旅であり、世界に対する親近感です<sup>20</sup>。兄弟たちはその世界から誰も逃れたいとは思いません。むしろ、そこを自分の修道院 (cloister) <sup>21</sup>と考

---

<sup>16</sup> 遺言 14,15。

<sup>17</sup> 2 チェラ 15、ペルーシアの無名作家による伝記 10-11、三人の伴侶の伝記 27-29。

<sup>18</sup> 1 チェラ 29。

<sup>19</sup> 非裁可会則 14、裁可会則 3。

<sup>20</sup> 総長報告書 17:6。

<sup>21</sup> サクルム・コンメルチウム 63。

ています。それこそは、貧しい人々、**道ばたに見捨てられている**<sup>22</sup>人々の生活を分かち合うことにほかなりません。世界を巡り行くこのような在り方こそが、いただいた福音の賜物をお返しすることなのです。

8. フランシスコとその兄弟たちは、自分たちの直観を具体的な現実に変える選択をします。その選択とは、金銭に触れぬこと、しかし、働くことや重い皮膚病の人の世話をすることは拒否しないというものでした。彼らは馬に乗らないことを選択しましたが、それは、世界中を旅することを拒否するという意味ではありません。彼らは、**聖職者の特権は固く拒否しましたが、常に聖なる教会の足下に臣下としてとどまる**<sup>23</sup>ことを宣言しています。彼らは生活の糧については、神の御旨に委ねることを選択しており、それゆえにこそ、**彼らは差し出される食べ物はすべて食べることができる**<sup>24</sup>のでした。このように、最初の兄弟共同体は、時のしるしを読み、福音の教えを当時の人々に分かりやすい具体的な方法で実践することのできる預言的な兄弟共同体として、また、しるしである兄弟共同体<sup>25</sup>として出現しています。

9. 平和の福音を告げ知らせるにあたってフランシスコとその兄弟たちが用いている福音的な創造性は明確です。たとえば、互いに反目し合っていた司教とアシジの市長とを和解させるのに成功した<sup>26</sup>方法を考えてみましょう。フランシスコのとった行動は単純で賢明です。彼は反目の原因となっていた経済的な問題や権力の問題には立ち入らず、「政治的な」解決を図ろうともしていません

---

<sup>22</sup> 非裁可会則 9:2。

<sup>23</sup> 裁可会則 12:4。

<sup>24</sup> 裁可会則 3:14。

<sup>25</sup> 総長報告書 31 参照。

<sup>26</sup> ペルージアの伝記 44 = アシジ・コンピレーション 84。

ん。彼はただ、自分の作った「太陽の歌」を聴いてくれるように誘いかけただけです<sup>27</sup>。彼の受けた賜物である創造性が、両者を互いの相違を解決する方向に導いたのです。感情に訴え、心に語りかけるのに音楽や歌以上に効果的なものがあるのでしょうか。「賜物の論理」<sup>28</sup>は明らかに、当時も今も社会を支配する価格の論理や利益、効率の論理に勝るように思われます。

10. 自分に与えられた賜物を福音のために捧げる方法を知っていたフランシスコと昔の兄弟たちのように<sup>29</sup>、私たちも、福音の賜物を受け取り、それを創造的に自分の生活をもって、具体的な行動で、自分の才能を発揮することによって、お返しするように求められていると思います。私たちはイエスの御言葉に耳を傾け、それを福音の精神で<sup>30</sup>現代の人々にお返ししたいと願っています。この世を小さき兄弟として、心を主に向けた福音宣教者として旅しながら。

## II.福音の賜物に応える

総集会の間にさまざまなテーマが持ち上がりましたので、それらを「お返しする」ための可能な方法として兄弟の皆様を提供したいと思います。

### 福音宣教

11. 福音はその最も深い部分において、分かち合うことを前提

---

27 ペルージアの伝記 24 = アシジ・コンピレーション 66。

28 「主は道々私たちに話してくださる」 19-25 参照。

29 完全の鑑 85。

30 マタイ 25:40 参照。

として与えられた賜物です。福音化するために派遣されるということは、福音のまさに最も深い部分から来ており<sup>31</sup>、同時に信仰が求めるものでもあります。実際、本物の神体験をすると、動きたくなくなるものなのです。なぜなら、その体験を他者と分かち合うという緊急の必要を感じないで、《愛にましまし、愛そのものにましまし、盲目的に愛してくださる神の無限の抱擁を感じる事》など不可能だからです<sup>32</sup>。結局のところ、福音化するという事は、エンマウスの体験をするということ、自分の信仰体験を分かち合うために出かけるということなのです<sup>33</sup>。そして、分かち合う人は、《応えている》こととなります<sup>34</sup>。

12. ダイナミックな福音化を麻痺させる恐れのある無感動や膠着状態が、私たちに影響を及ぼすような信仰の危機を表しているのではないだろうかと思いつつ、健全な自己批判をすることは必要です。恐らく問題の核心は、私たちが信じていないという事実にあるのではなく、私たちが自分の信仰の中心にどのような神の姿を描いているかにあるのではないのでしょうか。私たちの信仰に独創性を与えている三位一体の側面を見失うほどに、一神論的な信仰の部分だけを一面的に強調する傾向はないのでしょうか。この質問は的を射ています。なぜなら、福音化するために派遣されることが意味を持つのは、父であり、その交わりと愛の深みから、その王国の福音を告げ知らせるために、聖霊の働きによって、御子を遣わされた神を信じる信仰に根ざしているときだけだからです。そしてさらに、この信仰を前提としてこそ、私たちは福音化するミッションが私たちフランシスカンの召命に本質的に固有の

---

<sup>31</sup> マタイ 28:18-20、マルコ 16:14-20、ルカ 24:46-48、ヨハネ 20:21 参照。

<sup>32</sup> ヨハネ 1:35-42、ヨハネの手紙 I,1:3 参照。

<sup>33</sup> 「主は道々私たちに話して下さる」 39-40,43-44。

<sup>34</sup> 「主は道々私たちに話して下さる」 19、総長報告書 19。

ものであることを理解することができるのです。なぜなら、私たちはみな三位一体の信仰のしるしのもとにフランシスカンの召命を抱いているからです。いとも聖なる三位の栄光と賛美のために<sup>35</sup>。三位一体の信仰と霊性を土台として、私たちは賜物の論理のダイナミクスに与ることができます。この論理によって、兄弟たちが持っている賜物の豊かさは、社会的・文化的・宗教的背景の多様性とあいまって、本会のミッションにカリスマ的で種々多様な特徴を与えています<sup>36</sup>。私たちの生活、兄弟性、そして兄弟たちの賜物を束ねる原則としての三位一体の神を中心に考えるかどうか、私たちの福音化するミッションを活性化する希望がかかっているのです<sup>37</sup>。

## 人々の間に在るミッション：福音の教えに基づき現代に根ざした 在り方

13. 総集会がこの数日間強調してきたもう一つの「お返し」の方法は、**人々の間に在るミッション** (*Mission inter gentes*)<sup>38</sup> と呼ばれるもので、主が私たちを派遣される場所でのあり方を示す表現であると同時に、世間に対する態度でもあります。これは、現実に根ざすプロセスで、あらゆる状況において私たちに人々と生活を共有させてくれるものです<sup>39</sup>。**人々の間に在るミッション** (*Mission inter gentes*) は、世間に対するこのような共感を前提とし、主の御托身の神秘の結果であると同時に延長でもあります。神の国の福音を告げ知らせるために、みことば—最初の小さき者—は、受肉されて人間となり、一つの具体的な社会文化の中で歴

---

<sup>35</sup> 誓願の宣立 (会憲 5:2)。

<sup>36</sup> 「主は道々私たちに話してくださる」 38、19-25 参照。

<sup>37</sup> 「主は道々私たちに話してくださる」 27,38。

<sup>38</sup> 総長報告書 16a、25。

<sup>39</sup> 現代世界憲章 1 参照。

史に刻まれ、罪以外のすべての人間の条件を共有されました<sup>40</sup>。キリストがすべての福音宣教のモデルであるならば、福音宣教者を人々の社会・文化的な現実実際に効果的に受肉させることこそ、ミッションに求められている不可避のことであると言えます。

14. このような願わしい受肉を遂げるためには、《**神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられた神の御子の模範に倣い**<sup>41</sup>》、自分自身を中心から外すことが必要です<sup>42</sup>。本会は自己に言及するのをやめ、もっと世界の未来に注意を向けるように求められていると感じます。会の未来を心配することよりも、人類の運命をもっと心配するべきであり、会の組織内部の調整に心を砕くよりも、目まぐるしく変わる時代に適応することの方に心を砕くべきなのです。文化の多様性、人権の主張と擁護、あらゆる種類の少数派の人々の出現と増大、貧しい人々をさらに貧しくしかねない新自由主義的な経済モデルの危機、容赦ない環境破壊、移住などの現象は特に、聖霊が私たちに訴え、応答を求めているものです。聖霊は昨日もそして今日も、絶えず私たちに語りかけ、御自身を現してくださいませ。

15. **人々の間に在るミッションとは、この世に対する優しさを意味し、それは、現代の人々と対話し、福音宣教するための条件なのです**<sup>43</sup>。このことは、世に迎合することでもなければ、世を批判するのをやめることでもありません。むしろ、主がお与えくださる前代未聞の恵みのチャンスを見出しながら、私たちを取り巻

---

40 ヨハネ 1:14、ヘブライ 4:5、フィリピ 2:7-8、ミサ第四奉献文参照。

41 フィリピ 2:6-7。

42 総長報告書 17c、23c。

43 総長報告書 17:5。

く社会背景や文化を肯定的に捉える術を学ぶことなのです<sup>44</sup>。私たちはかつての社会的・文化的・宗教的モデルが衰退し、現代のように、新しいモデルが時代の変化を伴って生じる、主のお与えくださる新しいカイロス（時）に生きています。このように、福音化するミッションは、出かけては戻ってくる動きであり、対話の姿勢をもって、与えると同時に受けることでもあります<sup>45</sup>。

**16. 人々の間に在るミッション**はまた、文化内開花（受肉）という形でも現わされます。神の御言葉の**完全な受肉**であるキリストに魅了された私たちも、自分が生きているさまざまな社会背景の中で福音の教えをどうすれば受肉させられるかを学びたいと願っています<sup>46</sup>。福音が意味を持つためには、私たちの伝えたいことを現代人が分かろうと努力してくれるだろうなどと期待してはなりません。世の言葉を学び、メッセージを分かりやすくする伝達方法を学ぶのは私たちなのです。使徒パウロはこう言っています：「**すべての人に対してすべてのものになりました。なんとかして何人かでも救うためです。福音のためなら、私はどんなことでもします。それは、私が福音に共にあずかる者となるためです。**」<sup>47</sup>」フランスの時代の教会の状況は、一つの教訓となっています。封建制度にがんじがらめになった教会は、福音の教えを当時の社会に伝える能力を失ってしまい、新しい世界を理解できずに、**ミッションのための言語を失ってしまったのです**<sup>48</sup>。

**17. 多くの兄弟が関わっている人々の間に在る（inter gentes）**  
福音宣教の形態の一つは、「伝統的」な福音宣教と呼ばれるもので、

---

<sup>44</sup> 総長報告書 29。

<sup>45</sup> 総長報告書 17:4。

<sup>46</sup> 総長報告書 263。

<sup>47</sup> 1 コリント 9:22b-23。

<sup>48</sup> 総長報告書 179a。

しきたりを守りながらも、新しい形態の福音宣教を決して排除したり、それに反発したりしないものです。

## 諸国の民へのミッション

18. 人々の間に在るミッションが最もよく表現され、ある意味で成就しているのは、**諸国の民へのミッション** (Mission *ad gentes*) においてです。総集会は機会あるごとに、このミッションを誠実に評価し、すべての福音宣教の中でもこのミッションの持つ本質的な特徴の重要性を強調してきました。実際、**諸国の民へのミッション**は、未だ福音を知らない人々に向けられ、回心を求めるケリグマ (救いのメッセージ) を告げ知らせることから生まれた信仰の最初の瞬間をユニークな形で示しています。告げ知らされ、分かち合われた信仰を通して、聖霊は交わりの絆をつくられ、そこから教会が生まれました。この宣教的活力 (missionary dynamic) は、本質的に教会の外観にふさわしいものです。なぜなら教会は、「行って、すべての民を弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」<sup>49</sup>と言われたイエスの命令に忠実であるからです。

19. フランシスコとその初期の兄弟たちは、弟子たちを宣教に派遣することについての福音書の言葉に特に感銘を受けました<sup>50</sup>。その箇所には、いかなる安全を保証するものも持たず、世を巡るようにとの教えが示されていたのです<sup>51</sup>。これは、フランシスカンの伝統の典型的な特徴であり、当初から、兄弟たちは国境を越え、

---

<sup>49</sup> マタイ 28:19-20。

<sup>50</sup> ペルーシアの無名作家による伝記 10-11、2 チェラ 15。

<sup>51</sup> ルカ 9:3 参照。

危険を冒してキリスト教国の境界を越えることを学んでいたわけです。最初の兄弟共同体の物語を特徴づけていたのは、山を越えて北欧に向かい、海を越えて東方に向かったミッションです。フランススコ自身は1217年の総集会の後にこれら最初の宣教師たちの派遣を思いつきました。彼自身が東方に向かう2年前のことです。

20. 会則によると、ミッションは人間の思いつきによるものではなく、**神の勧め（靈感）によるもの**です<sup>52</sup>。このことは、現代の私たちの**諸国の民への**ミッションに新たな活力を与える本質的な特徴となっています。ご自分の意思のままに風を吹かせ、その風によって私たちの背中を福音化へと押してくださる聖霊に心を開いてこそ、私たちはともすれば萎えがちな宣教者としての力と情熱を再発見することができるのです。この点について非裁可会則は兄弟たちに二つの方法を示しています。一つは、神のためにすべての人に従い、静かに証しすること、もう一つは、「主の御心にかなうと判断するなら」神の御言葉を宣べ伝えて、回心を勧めることです<sup>53</sup>。これらは、主の霊に心を開くことによって初めて可能となる**人々の間に在る**ミッションの特徴と**諸国の民への**ミッションの特徴を兼ね備えたとても貴重な助言です。福音をはっきりと宣べ伝えることは、いつが「主の御心にかなう」時なのかを注意深く識別した後に訪れる、小さき者としてこの世に存在する私たちのあり方の到着地点なのです。

21. **諸国の民への**ミッションに注意を払うことについて、総集会は、各管区（構成単位）が互いに協力し合って、まだ若い管区と古くからの伝統を持つ管区との間で意見交換をしてほしいとお

---

<sup>52</sup> 裁可会則 12:1。

<sup>53</sup> 非裁可会則 16:5-7。

願いました。今日、自国の国境を越えて宣教することがすべての兄弟に求められており、世界的なレベルで人々が移住する現状では、この宣教者の側面に新たなアプローチを試みる必要があります。

## 境界に身を置くこと

22. 福音宣教者とは、派遣されているという単純な事実によって絶えず境界 (Border) を越える人のことです。境界と言っても、**諸国の民へのミッション**に見られるように、地理的な国境を指す場合もありますが、それ以外の場合もあり、私たちはその越え方を学ばなければなりません。私たちは区分けの厳しい仕切られた社会に生きており、そのために、差別や排斥が生じ、極端な場合には、身体的、心理的、思想的な暴力が生まれています。現在の社会、教会、そして本会それ自体の状況下では、これらのことは特別の重要性を持っており、私たちは旅をしながら、男女の境界、聖職者と信徒の境界、金持ちと貧乏人の境界、文化と自然の境界、身体と魂の境界、市民と移民の境界、祈りと仕事の境界、修道会と世間の境界、共同体と個人の境界を越えるように緊急に求められています。福音宣教には、これらの境界に穴をあけ、境界の両側からの交わりとコミュニケーションができるようにすることも含まれます。繰り返しますが、三位一体の信仰と霊性だけが、分断された世界の割れ目に住まうことを可能にしてくれるのです。「お返し」に至る道として、和解のために努力し、さまざまな意見の相違を越えながら。

23. また、不鮮明で、際限がなくなりつつある別の境界もあります。グローバリゼーションはこの事実を示すよい例でしょう。これこそは、現代の最大のパラドックス (逆説) の一つです。あ

る人々にとっては、境界が密閉されているのに対し、別の人々にとっては、境界がないのです。移民という現象、特に難民の問題は、この相克した論理の枠内に当てはまります。毎年何千もの人々が貧困と暴力によって故国を追われ、その多くは自分自身とその家族の最も基本的なニーズを満たす手段を求めている最中に命を落としています。彼らの放浪 (itinerancy) は、貧しい人々、少数派の人々の放浪です。私たち小さき兄弟は、私たちのカリスマのこれらの価値がよりよく生かされるような場を社会に見出し得ているのでしょうか。彼らの間に福音的な形で身を置くことができれば、それは、金銭や物品やサービスの流れだけが自由に行き交い、人間、特に**貧しく寄留者であられた**<sup>54</sup>神の御子の秘跡である貧しい人々が動きようのないこの世界で、「お返しすること」の雄弁なしるしとなるのではないのでしょうか。御托身によって、人となられた御言葉は、御自身を世の片隅に、脆く貧しい人々の側に置かれたのです<sup>55</sup>。**その模範をキリストの小ささに置いている私たちの小ささは、勇氣ある選択へと変わらねばならないこと、そして、その選択が、私たちをして「修道生活の極限を決然たる態度で選び取るために、社会的・教会的身分を捨てさせ、フランシスカン・アイデンティティーの本質としての極限を体験させてくれるのだ**<sup>56</sup>ということ、私たちは忘れてはなりません。

24. その中でさまざまな感受性が生まれ、共通の場を分かち合っているような世界の誕生を私たちはこの目で見ています。たとえば、アフリカ、アジア、ラテンアメリカなど。つい最近まである地域では多数派であった文化や宗教がそうではなくなり、別の文化や宗教が台頭してきて、己の権利が認められ、存在すること

---

<sup>54</sup> 非裁可会則 9:5。

<sup>55</sup> 全キリスト者への手紙 II:4-5。

<sup>56</sup> 総長報告書 32b。

を主張するようになってきています。他の文化や宗教に出会うために何千キロもの旅をする必要はもはやないのです。彼らと対話するチャンスはすでに手の届くところにあります。《対話に向けて私たちを養成し》、福音をこれらの地域に再びもたらすこと（「お返しすること」）は、聖霊の御業です<sup>57</sup>。聖霊の御働きには境界がありません。なぜなら、**地理的な境界ばかりでなく、人種と宗教の境界を越えて、真に普遍的な使命のために人々を駆り立てる力の源泉は聖霊だからです**<sup>58</sup>。

## 信徒及び「彼らと共に進む福音宣教」

25. 福音化するミッションは、聖職者だけでなく、全教会に与えられた使命です。様々な使徒職がある中で、すべてのキリスト者は神の国の福音を宣べ伝えるために自分を派遣しておられる主のご命令に答えなければなりません。教会を正しく理解するということは、多様なカリスマと使徒職の基本が洗礼という共通の条件から生まれていることを認めることなのです。それゆえに、私たち小さき兄弟は、信徒と共に力を合わせて福音宣教を推進するように求められていると感じています。それこそは、神の教会に対する神の賜物である福音に正しく《**応える**》ことにほかなりません。このようにして、信徒は、**伝えられた信仰を守り、実践し、公言する**<sup>59</sup>という権利と義務を行使します。信徒は、特権によるのではなく、ましてや人手不足を補うための手段としてでもなく、本来、福音宣教者なのです。その結果、私たちは「教会論的な会話」を始めなければならなくなっています。それは、いまだに一部の兄弟たちの間に広がっている聖職者偏重主義のメンタリティ

---

<sup>57</sup> 裁可会則 12:1。

<sup>58</sup> 「救い主の使命」(Redemptoris missio) 25、30 参照。

<sup>59</sup> 「啓示憲章」10。

一を克服する助けとなることでしょう。教会のモデルが司祭と聖職者の使徒職にのみ基づくものであったなら、信徒と共に行う福音宣教 (shared evangelization) の入る余地などなかったでしょう。なぜなら、福音宣教を信徒と共にするということは、ある種の安全を進んで放棄し、権力と行動の余地を譲渡する潔さを意味するからです。それゆえに、そのような「お返し」は、聖霊が働いておられることの具体的なしるしであり、そうしたしるしの預言的な発明者になれるかどうかは、私たち小さき兄弟次第なのです<sup>60</sup>。

26. 《聖職者の兄弟とブラザーの兄弟で構成された本会は、ブラザーの修道召命の賜物を理解し、評価します。》この点に関し、総集会で出されたいくつかの指針を思い起こすことは有益であると思います。本会の一部の地域では、会憲によればすべての兄弟に平等に与えられるべき養成の機会に関して差別が見られるということ、そして、私たちの使徒職を行うやり方が必ずしも福音化するミッションへのブラザーの兄弟の積極的な参加を促すものとなっていないことは、すでに述べました<sup>61</sup>。この点に関し、各兄弟の才能と聖霊の示しによるさまざまな召命を尊重した、すべての兄弟のための一つの養成が必要であることを再確認しました。すべての志望者は、福音宣教の一つのやり方だけを実行するのではなく、福音化するように養成される必要があります。これと同じ視点から、聖職者偏重主義が時として会の中に見られるのは、現在の養成のあり方に問題があるからではないかと自問してみる必要があります。養成機構に問題があるために、養成中のブラザー志願の兄弟が聖職者の教育課程以外にはダイナミックな養成を受けられる場所はないと感じて、それだけのために叙階される道を

---

<sup>60</sup> 総長報告書 30。

<sup>61</sup> 総長報告書 137b。

選ぶことも少なくありません。

本会の執行部は、私たちの会を（聖職者とブラザーの）混合修道会として是非とも認めてもらうように聖座に要請し続ける努力をここ数年来重ねてまいりました<sup>62</sup>。それは、賞賛すべきことですが、私たち全員が望んでいる《この》教会法上の立場の変化には、兄弟共同体の実態の変化が伴わなければなりません。

### 生活とミッションの兄弟共同体としての計画（plan）

27. いかなる福音宣教プロジェクトも、個人のイニシアチブによるものでもなければ、個人の所有でもありません。福音化するのは常に兄弟共同体なのです。兄弟たちが三位一体の共同体の似姿として互いに配慮を示し合うためには、兄弟的な生活の質に綿密な注意を払う必要があります。管区長や修道院長が果たすべき活性化の役割の重要な一部は、兄弟的な関係に、交わりや相互のコミュニケーション、温かみや誠実さを再形成する手段を探すことです。

28. 福音のダイナミズムを備えた生活は、神の国への抑えきれない欲求となっています。主が蒔かれた種の実りを失いたくなければ、生活を形作らなければなりません。それゆえに、兄弟共同体と管区（構成単位）が「兄弟共同体としての生活とミッションの計画」を作成する必要があるのだと私たちは確信しております。このように確信するにいたりました理由は、運営上の効率を考えたからではなく、福音化するミッションを私たちの生活の中に根付かせ、そこに私たちの決断を導く優先課題を打ち立てる必要があるからです。《ここ数年来、私たちは生活の優先課題について

---

<sup>62</sup> 総長報告書 137c。

検討してきましたが、ついに今や次のように確信するにいたりました。≫つまり、優先課題と福音化するミッションとの間には、私たちのプロジェクトを巡る実践についての情報交換が必要だということです。こうした大きな広がりのある視点から見れば、福音宣教は、小さき兄弟の回心の旅路の目標、従って生涯養成の目標のように思われます。福音化するミッションは、単なる私たちの生活の「外的な」側面ではないのです。事実、あらゆる召命とカリスマの源である聖霊の働きによって、奉献生活それ自体が一つの宣教です。イエスの全生涯も同様でした<sup>63</sup>。

29. 私たちは社会に対しても敏感でなくてはなりません。それは、社会科学の批判的な道具によって試され、信仰の目によって識別されたこの現実との接触によって、主が私たちに求めておられるプロジェクトとは何かを知るためです。私たちはこの世界の未来に背を向けてはなりません。特に、現代文化がチャンスと不安定さ、失望と懐疑を伴って私たちに多くの課題を投げかけているこの時代においてはなおさらです。本会は、この世界と共に旅をするのを選びました。それも、発せられた質問に対して即答できる者としてではなく、私たちの兄弟姉妹、現代の人々と同じように意味を乞い求める者として<sup>64</sup>。私たちはこの選択に忠実でいられるでしょうか。社会に対する意識なくして、「生活と福音化するミッションの兄弟共同体としての計画」を作成することはできません。ですから、会の組織を再編することに夢中になる前に、**時と場所のしるしを注意深く読み**<sup>65</sup>、それらのしるしからメッセージを読み取らなければなりません。

---

<sup>63</sup> 奉献生活 72、「あなたがたは自由を得るために召し出された」20に引用。

<sup>64</sup> 「主は道々私たちに話してくださる」6。

<sup>65</sup> 総長報告書 184。

30. 私たちの生活と福音化するミッションの肥やしとなる靈性は、周囲の人々の生活や彼らの関心事と決して無縁ではありません。環境正義、積極的な非暴力、難民、移民、土地を持たない者、少数民族、《連帯の精神での》財貨の倫理的な使用、《エイズの蔓延》、これらは、私たちが日々の御言葉の祈りを込めた奉読の中で、祈られ、識別されるべき多くの現実の一部にすぎません。正義と平和と被造物の保全の価値は、福音に根ざしたものであり、私たちの祈りと献身の生活の中に、また、私たちの日常生活と使徒職の実践の中に自然ににじみ出るものでなくてはなりません。私たちは対話の橋、出会いの橋、和解の橋、そして平和の橋を築くように求められています。そして、発展過程をすべて含んだ生活そのものの文化を伝えるメッセンジャーとなるように、そして最後に、希望の守護者となるように求められているのです。

31. 私たちのあり方と管区（構成単位）の「再編」は、閉鎖や合併などを含むのが普通です。これは見直しと再構築（リストラ）の一部です。これは苦難を伴うプロセスですが、その中に復活の恵みを発見するように、より素朴でより繊細な形で、しかし、より預言的で確かにもっと小さき者として、自分の居場所に何らかの意義を見出すように求められています。私たちの会においては、これはかつてないほどはっきりした現実であり、それは私たちに視野の狭いメンタリティーを克服し、管区を越えた見通しと管区長協議会及び会への帰属意識を高めるためのまたとないチャンスを与えてくれています。

## 結論

32. 兄弟的な出会いの最終段階に差し掛かった今、これまで

お与えくださったすべての善きものについて主に感謝することを忘れてはなりません。主は会の800年の歴史においてお与えくださったように、これからもずっとお与えくださるに違いありません。過去何世紀にもわたり、時には静かな生活の証しによって、また、時には福音をはっきりと宣べ伝えることによって、世界に神の国の種を蒔いてきてくださった多くの兄弟たちのご尽力に対しても感謝しております。また、本会の無数の殉教者たちが示してくれた崇高な信仰の証しに対しても感謝いたします。聖地やアフリカ、極東での諸国の民へのミッションにおいて、また、小教区司牧という伝統的な形態で、あるいはまた分断された土地で福音的な存在による証しによって、神の国のために寛大さと想像力と創造性をもって今も働いておられるすべての人々にも感謝いたします。そして、**《クララ会の姉妹たち、在世フランシスコ会の兄弟姉妹たち、YouFraの人々（若いフランシスカンたち）、及びフランシスカンの理想に対する私たちの情熱を共にして下さっているすべての信徒の方々に、感謝申し上げます。》**最後に、現代の多くの兄弟の方々の夢—ある夢は理想に満ち、ある夢は苦しみに満ちていながらも、すべて未来を担っている夢—に対して、感謝いたします。本会の総長であられる主の霊の今後も続く御働きを感謝の念で見つめてまいります。主の霊は、御父の王国の福音を御子のなさり方で世界に告げ知らせる道において、私たちを支え、導いてくださるからです。

33. **《総集会の間に》**、天使の聖母聖堂で聖霊降臨祭前夜を祝うことができました。バジリカの広場に集まり、山のように積み重ねた乾いた木の枝を囲みました。祝いの最中に、復活されたキリストのしるしである復活祭のロウソクの炎で木の枝に火がつけられました。キリスト教の象徴は、このような火と聖霊とを結びつけることがよくあります。そのイメージは根拠のないものではありません。使徒言行録に記されている聖霊降臨の話によれば、

聖霊が使徒たちの上に降ったとき、炎のような舌が一人一人の上にとどまったとあります。

火があるためには、燃えやすい物質がなくてはなりません。なぜなら、火は光と熱という形で解き放たれたその物質の内面のエネルギーにすぎないからです。その瞬間に燃え上がった焚き火は、聖霊に触れられるならば、どれほど乾いて枯れているように見えようとも（そこに積み重ねられていた木の枝が乾いて枯れていたように）内面からエネルギーと光りと熱を生み出すことのできないものは何一つなく、だれ一人いないということを、象徴的な言語で私たちに思い起こさせてくれました。聖霊の御働きは特に、人や環境の内面にある潜在力を解き放つことにあります。聖霊降臨とは、私たちを、自分の内面に潜む予期せぬ力に驚かされて、《**旅立たせる**》ことを意味しています。その力を解き放つためには、ロウソクの灯のような火花が、小さな炎があれば《**十分なのです**》。それは、復活された方の炎です。その後のことは聖霊が引き受けてくださいます。

聖霊降臨祭の訪れとともに、復活節は終わりを告げます。それは、一つの典礼暦が終わって、別の普通の典礼暦が始まるからではなくて、聖霊降臨が復活された方と、彼を信じる人々の日常生活を結びつける橋であるからです。聖霊降臨とは、あまりにありふれた普通の日常生活において、自分自身を聖霊によって復活の炎で燃え立たせることなのです。フランシスコが総集会を聖霊降臨祭に開くことを望んだのには理由があったのです。そういう訳で、私たちはここに集まりました。

栄光は父と子と聖霊に、初めのように今もいつも世々に。アーメン<sup>66</sup>。

---

<sup>66</sup> 非裁可会則 24:5。

2009年アシジ総集会 総括文書

翻訳・発行：フランシスコ会日本管区

発行日：2009年10月4日

106-0032

東京都港区六本木 4-2-39

聖ヨゼフ修道院

03-3403-8088